自己呈示する特性の記憶想起は他の特性に影響を与えるか
—上田・山形（2023）のデータを用いた探索的検討—

上田 皐介（名古屋大学 大学院教育発達科学研究科，ueda.sasuke.t1@s.mail.nagoya-u.ac.jp）
山形 伸二（名古屋大学 大学院教育発達科学研究科，yamagata.shinji.x9@f.mail.nagoya-u.ac.jp）

Does recalling trait-related episodes for self-presentation influence other traits?:
An exploratory analysis of Ueda and Yamagata's (2023) data

Sasuke Ueda (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University, Japan)
Shinji Yamagata (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University, Japan)

Abstract

Ueda and Yamagata (2023) demonstrated that when participants were asked to recall personal episodes for writing self-introductions aimed at giving either an extraverted or an introverted impression to others, their levels of extraversion or introversion changed in accordance with their self-presentation. This study explored whether traits not targeted for impressing others (i.e., the Big Five personality traits other than extraversion) also changed. A secondary analysis of their data (N = 422) revealed that in the extraversion condition, all traits exhibited changes toward more socially desirable directions, whereas in the introversion condition, only agreeableness and conscientiousness did so. The magnitude of change across the traits was correlated, suggesting the existence of a shared mechanism. These results suggest that recalling episodes for self-presentation may lead to broader personality changes, including in traits not explicitly targeted. We proposed several mechanisms that could explain the observed changes.

Key words

self-presentation, internalization of self-presentation, Big Five, exploratory analysis, secondary analysis

1. 問題と目的

自己呈示とは、他者に特定の印象を与えようとする一連のプロセスを指す（Leary, Allen, & Terry, 2011）。自己呈示により、呈示者の自己認知が自己呈示と一致する方向に変化する自己呈示の内在化（internalization of self-presentation: 以下、IOSP）という現象が知られている（e.g., Tice, 1992; Ueda, Yamagata, & Kiyokawa, 2024）。例えば、外向性の自己呈示をした後に、自身を外向的に捉えるようになることをいう。IOSP は自己知覚理論（Bem, 1972）や偏ったスキャニング（Jones, Rhodewakt, Berglas, & Skelton, 1981）によって説明されてきた。自己知覚とは、他者の行動の観察から他者の特性や態度を認識するのと同様に、自己認知も自身の行動の観察により形成されることを指す。偏ったスキャニングとは、自身の行動により、自己の特定の側面に注意が向き、それと関連する記憶へのアクセシビリティが高まることをいう。しかし、Ueda et al.（2024; Study 2）では、外向性の自己呈示では IOSP と整合的な方向の変化が生じたものの、内向性の自己呈示では変化が生じなかった。自己知覚や偏ったスキャニングは、行動の内容（i.e., 呈示する特性）を問わず、自己認知が変化することを想定しており、内向性の自己呈示で変化が生じないという結果と整合しない。

外向性の自己呈示でのみ IOSP と整合的な変化が生じた理由として、上田・山形（2023）は、外向性と内向性の社会的望ましさの違いに着目し（社会的望ましさ：外向性 > 内向性 ; e.g., John & Robins, 1993）、社会的に望ましい特性の自己呈示でのみ社会的に望ましい方向への変化が生じる可能性を検討した。その際、自己欺瞞による予測がなされた。自己欺瞞とは、偏った情報処理により自身に都合の良い信念を抱くことを指す（von Hippel & Trivers, 2011）。上田・山形（2023）は、自己呈示する特性についての自身のエピソード想起に自己欺瞞が関与し、想起する内容が社会的に望ましい場合に積極的に行われ、自己概念を変化させる可能性を指摘した。さらに、自己欺瞞は他者と関わる前に生じることを踏まえると（Butterworth, Trivers, & von Hippel, 2022）、IOSP とされてきた自己概念の変化の少なくとも一部は、自己呈示の前から生じている可能性を指摘した。この研究では、本実験の 7 ～ 10 日前に参加者の外向性（T1）が測定された。本実験では、実験の協力者として、外向性条件では外向的な、内向性条件では内向的な印象を与えるように自己紹介文を書いてもらうというカバーストーリーが用いられた。自己紹介文に書く内容を考えてもらう時間の後、自己紹介文を実際に書いてもらう直前に外向性（T2）が測定された。その結果、外向性条件では T2 の外向性が T1 より高かった。また、内向性条件では T2 の外向性が T1 より低かった（i.e., 内向性が高まった）。これらは、実際に自己呈示をしなくても、呈示する特性に関する記憶想起のみで IOSP と同方向の変化が生じたことを意味している。なお、変化の大きさは外向性条件でより大きく自己欺瞞が関与するという説明と整合的であった（ただし、効果量は点推定値であり、信頼区間は重なっていた）。

しかし、上田・山形（2023）は外向性の変化のみを検討している。上田・山形（2023）でみられた変化が、自

己呈示のための記憶想起によるものならば、外向性以外の特性が変化していないことを示す必要があるだろう。しかし、この点は検討されていない。上田・山形（2023）では、外向性以外の Big Five の 4 特性（i.e., 神経症傾向、開放性、調和性、誠実性）をフィラーとして測定したため、これらに変化が生じたかを検討することが可能である。そこで、本研究では、上田・山形（2023）のデータを用いて、外向性または内向性の自己呈示の直前に、外向性以外の特性が変化するか、また変化する場合どのように変化するかについて、探索的に検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 参加者とサンプルサイズ

上田・山形（2023）で用いられたデータを分析した。日本人（20 ～ 64 歳）を対象とし、クラウドソーシングサービスであるランサーズにより行われた。最終的な分析対象者は 422 名（男性 183 名、女性 239 名；外向性条件 202 名、内向性条件 220 名）であった。平均年齢は 40.44 歳（*SD* = 9.45）であった。上田・山形（2023）では、以下のようにサンプルサイズ設計が行われた。Ueda et al.（2024）における IOSP の効果量の 4 分の 1（$f = .14$）以上の変化が、自己呈示前に記憶想起によって生じると想定された。$\alpha = .05$、$1 - \beta = .80$、$f = .14$ のときの必要なサンプルサイズは 404 名であった。本研究では、各条件で特性ごとに時点（T1・T2）の差得点の標準化効果量である *dz* を 95 % 信頼区間とともに報告する。各条件で検出可能な効果量は、$\alpha = .05$、$1 - \beta = .80$ とすると、外向性条件（$n = 202$）で $dz = 0.20$、内向性条件（$n = 220$）で $dz = 0.19$ であった。

2.2 手続き

実験は 2023 年 1 月 11 日から 2023 年 3 月 2 日に行われた。事前調査（以下、T1）とその 7 ～ 10 日後に行われた本実験（以下、T2）から成り、両方とも Qualtrics により行われた。参加者の募集にあたって、自己紹介文から他者の性格を見抜くことができるかを調べる研究の協力者として、書き手を募集しているというカバーストーリーが用いられた。T1 では、Big Five 尺度（和田，1996）に参加者が回答した。その際、Big Five 尺度の測定のための教示は「それぞれの項目が『自分にどれだけあてはまるか』を考え、1 ～ 7 の数字のいずれか 1 つを選んでください。」であった。この他、参加者はフィラーや Satisfice 検出項目へ回答した。T2 では、Qualtrics により外向性条件または内向性条件に無作為に割りあてられた。実験の協力者として自己紹介文を書くことを通じて、外向性条件では、読み手に外向的な印象を与えることを、内向性条件では、内向的な印象を与えることを求められた。その際、外向性条件では、外向的な人物の定義（「外向的で、社交的で、社会的なスキルがあり、新しい状況に自分から向かい、新しい人々に会うことに熱心で、リーダーシップがあり、他者と一緒にいることに熱心な、人付き合いの良い」といった人物）を、内向性条件では、内向的な人物の定義（「内向的で、内気で、思慮深く、敏感で、物静かで、でしゃばりではなく、威張り散らさず、他人の注意を無理に惹こうとはしない」といった人物）を教示された。これらは Ueda et al.（2024）で用いられた定義と同一であった。また自己紹介文には作り話を書くのではなく、自身の経験について書くこと、個人情報（名前、年齢、職業、生年月日、居住している市区町村名）を書くことを求められた。これらの説明を聞いて協力者を行うことに同意した参加者が以下の手続きに進んだ。自己紹介文では上記の個人情報と「同性の友達との関係」「趣味や休日の過ごし方」「これまでしてきたことで最も重要だったこと」について書くように求められた。この後、自己紹介文に書く内容を考える時間を 3 分間設けられた。3 分経過後、自己紹介文を書く前に、Ueda et al.（2024）における自己呈示後の自己認知の測定と同様に、「自己紹介文を読んだ評価者の評価と比較をするために、以下の質問への回答をお願いします。それぞれの項目が『本当の自分にどれだけあてはまるか』を考え、1 ～ 7 の数字のいずれか 1 つを選んでください」という教示のうえで、参加者は Big Five 尺度（T2）へ回答した。その後、自己紹介文を書くことなく実験は終了し、デブリーフィングが行われた。詳細な手続きは、事前登録（https://doi.org/10.17605/OSF.IO/VAF2H）を参照されたい。

2.3 事前登録

上田・山形（2023）は査読付き事前登録（registered report）された研究である。本論文で実施する分析は全て事前登録時に計画されておらず、探索的に行った。

3. 結果

3.1 記述統計

外向性条件、内向性条件の記述統計を表 1 に示した。T1 と T2 の相関係数は、外向性とそれ以外の特性で同程度かそれ以上であった。

3.2 呈示しない特性の変化

各特性の変化を図 1 に示した。外向性条件では、全て望ましい方向に変化し、外向性の効果量は外向性以外の特性の効果量と同程度であった。内向性条件では、神経症傾向と開放性は効果量の信頼区間に 0 を含んでおり、T1 と T2 では変化がなかった。他方、調和性と誠実性においては信頼区間に 0 を含んでおらず、特に誠実性については、外向性と効果量の絶対値が同程度に大きかった。このように、自己呈示を求められていない特性にも変化がみられたため、以下ではさらに探索的に分析を進めた。

3.3 各特性の変化間の相関

外向性条件では全ての特性が変化しており、内向性条件では外向性以外に調和性、誠実性が変化していた。以下では、ある特性の変化と他の特性の変化に関連があるかを検討した。その際、T1 時点での各特性の相関の影響は除いたうえでの関連を検討する必要がある。そこで、

表 1：両条件における各特性の記述統計

Measure	T1		T2		T2-T1		*r* (T1 & T2)
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	
Extraversion condition (*n* = 202)							
Neuroticism	4.68	1.11	4.46	1.15	–0.23	0.64	.84
Extraversion	3.87	1.01	4.05	1.04	0.18	0.58	.84
Openness	4.17	0.83	4.29	0.82	0.12	0.46	.84
Agreeableness	4.54	0.86	4.62	0.87	0.08	0.24	.96
Conscientiousness	4.13	0.96	4.25	0.97	0.12	0.47	.88
Introversion condition (*n* = 220)							
Neuroticism	4.74	1.13	4.76	1.15	0.01	0.42	.93
Extraversion	3.83	1.07	3.71	1.10	–0.13	0.53	.88
Openness	4.14	0.96	4.12	0.93	–0.02	0.46	.88
Agreeableness	4.58	0.91	4.61	0.91	0.04	0.25	.96
Conscientiousness	4.15	0.94	4.24	0.96	0.09	0.42	.90

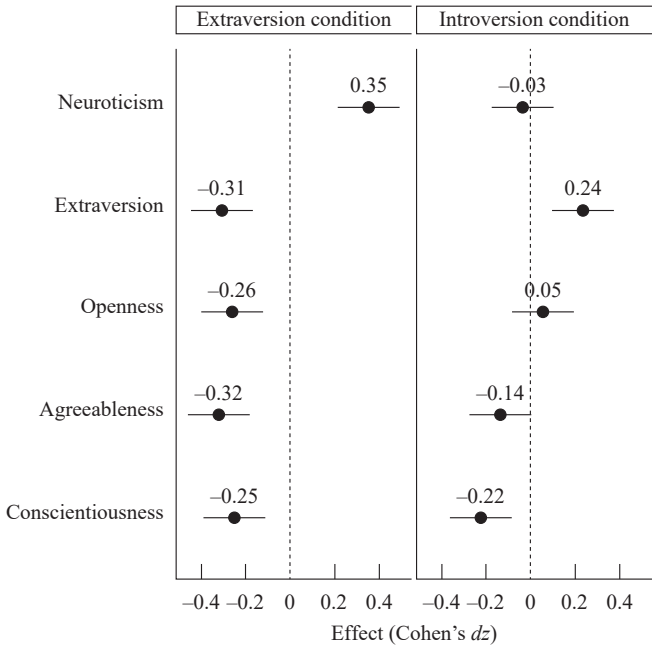

図 1：条件ごとの各特性の効果量

注：点は Cohen's *dz* の点推定値、バーは 95 % 信頼区間である。

特性ごとに、T2 の値を T1 の値で予測した際の残差を変化の指標とした。

まず、各特性の T1 での相関を表 2 に示した。外向性は特に神経症傾向と開放性との相関が強かった。

次に、各特性について T2 の値を T1 で予測した際の残差得点間の相関を表 3 に示した。外向性条件では、全特性の残差が有意に相関した。神経症傾向の残差は、全ての特性の残差と負に相関し、それ以外の相関は全て正の値であった。また、内向性条件においても、変化のあった調和性と誠実性の残差同士は有意に正に相関した。ただし、外向性の残差は、調和性の残差とは正に相関した（i.e. 外向性が低くならないほど調和性が高くなった）ものの、誠実性の残差とは有意な相関がみられなかった。

4. 考察

本研究では、外向性または内向性の自己呈示を求められた際に、自己呈示を求められていない特性が自己呈示の直前に変化したかを探索的に検討した。その結果、両条件で、自己呈示を求められなかった特性にも変化が生じた。

外向性条件では、外向性が高まるだけでなく、神経症傾向が下がり、開放性、調和性、誠実性が高まるという結果がみられた。神経症傾向は低い方が、外向性、開放性、調和性、誠実性は高い方が社会的に望ましいことが知られているため（John & Robins, 1993）、外向性条件では、全ての特性が社会的に望ましい方向に変化したこととなる。また、その効果量には特性間で差がみられなかった。

表 2：特性間の相関係数（T1）

	1	2	3	4	5
1. Neuroticism	–				
2. Extraversion	–.52 **	–			
3. Openness	–.36 **	.58 **	–		
4. Agreeableness	–.35 **	.35 **	.29 **	–	
5. Conscientiousness	–.25 **	.39 **	.32 **	.44 **	–

Note: ** $p < .01$.

表 3：特性の残差間の相関係数

	1	2	3	4	5
1. Neuroticism	–	–.43 **	–.07	.05	.01
2. Extraversion	–.56 **	–	.36 **	.16 *	–.04
3. Openness	–.22 **	.36 **	–	.25 **	.05
4. Agreeableness	–.23 **	.33 **	.38 **	–	.24 **
5. Conscientiousness	–.39 **	.47 **	.25 **	.19 **	–

Notes: The results for the extraversion condition (n = 202) are shown below the diagonal. The results for the introversion condition (n = 220) are shown above the diagonal. ** $p < .01$, * $p < .05$.

内向性条件では、外向性が低くなるだけでなく、調和性と誠実性が高まるという結果がみられた。他方、神経症傾向と開放性は変化していなかった。両条件の結果をまとめると、自己呈示を求めた特性は高まり、それ以外の特性で変化があったものは、いずれも社会的に望ましい方向に変化していた。

内向性条件においては外向性が下がった（i.e., 内向性が高まった）という IOSP と同じ方向かつ変化したもののなかで唯一、社会的に望ましくない方向の変化があったことから、呈示する特性に関するエピソード想起の効果自体はあったと考えられる。すなわち、上田・山形（2023）が主張した自己呈示のための記憶想起により自己認識が変わるというプロセス自体は直ちには否定されないだろう。ただし、そのうえで呈示を求められていない特性を社会的に望ましい方向へ変化させる何らかのメカニズムも同時に存在したと考えられる。呈示しない特性の中で変化があったもの同士の残差の相関は、外向性条件では、いずれの特性間おいても中程度であった。神経症傾向の残差は他の特性の残差と全て負に相関し、それ以外の特性間では全て正に相関したことから、これらは全て社会的望ましさの点で同じ方向に相関したといえる。また、内向性条件も変化のあった調和性と誠実性の残差にも正の相関がみられた。これらは共通のメカニズムの存在を示唆している。

以下では、自己呈示を求められていない特性に変化を生じさせた可能性のある 5 つのメカニズムについて検討する。

4.1 記憶想起による感情の生起

1 つ目は、特に外向性の自己呈示のための記憶想起により何らかの感情が生起し、その感情により自己呈示を求められていない特性が変化したという可能性である。感情の候補として、第一にポジティブ感情が考えられる。外向的な行動はポジティブ感情を生じさせるため（Margolis & Lyubomirsky, 2020）、外向性についての記憶想起もポジティブ感情を喚起させる可能性がある。ポジティブ感情は性格特性の評定に影響を与える可能性が指摘されていることから（Querengässer & Schindler, 2014）、本研究のデータにおいてもポジティブ感情が他の性格特性を望ましく評定するようなバイアスを生じさせたかもしれない。第二の候補として誇りの感情が考えられる。外向性は社会的に望ましいために、外向的エピソードの想起は誇りの感情を喚起し、これが他の特性を望ましく評定するようなバイアスを生じさせたかもしれない。ポジティブ感情の影響は外向性の自己呈示に特異的であり、誇り感情の影響は社会的に望ましい特性であれば生じうる（e.g., 誠実性）。今後は、外向性の自己呈示のための記憶想起に伴い何らかの感情が生じるか、その感情が変化を媒介するか、また外向性以外の特性の記憶想起により生じる変化についても検討する必要がある。

4.2 参加者に教示した定義と測定項目の乖離

2 つ目は、上田・山形（2023）で用いられた定義と尺度項目の違いに起因する可能性である。上田・山形（2023）では、外向性の測定項目と参加者が教示された外向的・内向的な人物の定義の内容が異なっていた。外向性は和田（1996）を用いて、順項目の「話し好き」「陽気な」「外向的」「社交的」「活動的な」「積極的な」と、逆転項目の「無口な」「暗い」「無愛想な」「人嫌い」「意思表示しない」「地味な」により測定された。一方、参加者に教示した定義は、外向的な人物では、「外向的で、社交的で、社会的なスキルがあり、新しい状況に自分から向かい、新しい人々

に会うことに熱心で、リーダーシップがあり、他者と一緒にいることに熱心な、人付き合いの良い」といった人物、内向的な人物では、「内向的で、内気で、思慮深く、敏感で、物静かで、でしゃばりではなく、威張り散らさず、他人の注意を無理に惹こうとはしない」といった人物であった。例えば、外向的な人物の定義に含まれる「社会的なスキル」では、調和性や誠実性の高い人物像を想定する可能性がある。また、内向的な人物の定義に含まれる「威張り散らさず」は、調和性の高い人物の要素とも考えられるだろう。今後は、教示する定義を測定項目と揃える必要がある。

4.3 エピソード内で異なる特性を表す行動が共起

3 つ目は、外向性を示すエピソードには、外向性以外の特性を表す内容が含まれる可能性である。個人間で 5 因子構造が安定的にみられる Big Five は、個人内では平均的に 5 因子構造ではなく 2 因子構造であることが近年明らかとなった（Grosz, 2023）。2 因子とは、望ましい項目からなる因子と、望ましくない項目から成る因子の 2 つであった。すなわち、ある人が平時よりも外向的であるとき、平均して情緒的に安定し、開放的で、調和的、誠実でもある（i.e., いずれも望ましい方向に状態的に高い）可能性がある。また、Margolis & Lyubomirsky（2020）は、参加者に生活の中で一定期間、外向的または内向的に行動するように指示を出し、外向的に行動した期間は外向性が高まり、内向的に行動した期間は外向性が下がったことを報告した。その際、外向的に行動した期間は誠実性も高まり、内向的に行動した期間は誠実性も下がった。この可能性を検討するには、参加者に実際に自己紹介文を書いてもらい、書かれたエピソードを分析し、他の特性を表す内容との共起を調べることが有効である。

4.4 T1 と T2 での教示文の差異

4 つ目は、上田・山形（2023）の教示文に起因する可能性である。具体的には、T1 と T2 の Big Five 尺度の教示文の違いにより、全特性で変化が生じた可能性がある。T1 では、「自分にどれだけあてはまるか」を尋ね、T2 では「本当の自分にどれだけあてはまるか」を尋ねた。この尋ね方は、Ueda et al.（2024）や Tice（1992）とも共通しており、Tice（1992）によると、自己紹介の後では、実験協力者として担った役割（i.e., 外向的な人物、内向的な人物）を回答させてしまう可能性が考えられることから、自己認識について回答してもらうために「本当の自分（true self）」について尋ねる必要がある。しかし、このためであれば、「自己紹介文を読んだ評価者の評価と比較をするために、以下の質問への回答をお願いします」という教示のみで十分だと考えられ、むしろこの尋ね方の違いによって、異なる構成概念を測定しているとみなすことも可能である。

参加者に真の自己（true self）と実際の自己（actual self）について回答を求めると、真の自己についての方が望ましく回答されることが明らかとなっている（Zhang & Alicke, 2021; Study 3a）。Zhang & Alicke（2021）では、参加者に、真の自己と実際の自己について、以下のような教示をしたうえで回答を求めている。真の自己とは、最も基本的なレベル、核としてもっている姿であり、日常的にこの自分を表現できていなかったとしても、持っている自分のことである。実際の自己とは、自分を表していなかったとしても、日常で実際に振舞う自分のことである。本研究の参加者が「本当の自分」を、上記の真の自己と同じ意味で解釈していた場合、記憶想起とは関係なく、自身を望ましく評定すると考えられる。今後の研究では、T1 と T2 の教示を揃える必要がある。

4.5 再検査効果

5 つ目は、再検査効果による可能性である。再検査効果とは、性格特性を 2 時点で測定すると、回答値が 2 時点目で 1 時点目より社会的に望ましい方向に変化する現象である（Windle, 1955）。再検査効果の研究は近年行われておらず、研究が行われた時代的背景から効果量は報告されていない。また、ミネソタ多面的人格目録（Windle, 1955）や YG 性格検査（速水，1976）で生じることが示されてきたものの、Big Five の各特性に再検査効果がみられるかは明らかでない。Big Five の各特性には社会的に望ましい方向が存在し、神経症傾向は低い方が、それ以外の特性は高い方が社会的に望ましいとされているため（John & Robins, 1993）、各特性に再検査効果が生じることは十分に考えられる。再検査効果は測定間隔が 1 週間の場合にも報告されていることから（Windle, 1955）、Big Five の各特性に再検査効果が生じる場合、本研究でみられた各特性の変化の少なくとも一部は、記憶想起とは関係なく再検査効果によるものかもしれない。また、Big Five に再検査効果が生じるならば、特性間で効果量に差があるかは重要である。本研究では、外向性とそれ以外の特性の効果量に差はみられなかった。再検査効果が特性間で同程度生じ、その効果量が本研究で報告したものと同程度である場合、外向性条件の各特性の変化は全て再検査効果である可能性すらある。ただし、再検査効果だけでは、内向性条件の開放性や神経症傾向に変化が生じていない理由が説明できない。今後、Big Five の再検査効果について研究を行うことが必要である。

4.6 まとめと限界

以上のように、様々な可能性が考えられ、またこれらが同時に関与している可能性もある。上で挙げた 5 つの説明では、外向性条件の結果と整合的なものが多いが、内向性条件での結果とは必ずしも合致しない。また先述の通り、内向性条件では外向性が下がるという、IOSP と整合的かつ唯一、社会的に望ましくない方向の変化が見られたことから、呈示する特性についてのエピソード想起の効果自体は存在すると考えられる。T1 時点で外向性は神経症傾向、開放性と高い相関を示した（順に、$rs = -.52$, $.58$）。このことから、内向性条件において、外向性と関連の強い神経症傾向と開放性では、社会的に望ましくない

方向への変化が生じ、これと上述の 5 つのいずれかのメカニズムとが相殺したことで、結果的に変化がみられなかったのかもしれない。

本研究の限界として、既存のデータを用いて探索的に検討した点が挙げられる。考察では、自己呈示を求められていない特性について変化した理由を 5 つ挙げたが、これらを個別に検討可能なデータではなかった。例えば、自身の外向性についての記憶想起に伴って感情が生じ、それにより外向性以外の特性が高まった可能性を考察したものの、上田・山形（2023）では感情を測定しておらず、直接検討できなかった。また、記憶想起を行わず、Big Five 尺度に二度回答するだけの統制条件がなかったため、教示文の差異の影響や、再検査効果の影響を推測することができなかった。今後は、考察した個々の可能性を検討する研究が必要である。さらに、参加者は自己呈示をしていないため、自己呈示後に、自己呈示した特性と自己呈示していない特性が同程度に変化するかは明らかでない。今後は参加者に実際に自己紹介文を書いてもらうなどして、自己呈示をした特性と自己呈示をしていない特性の変化の程度が異なるかを検討する必要がある。

引用文献

Bem, D. J. (1972). Self-perception theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, 6, 1-62.

Butterworth, J., Trivers, R., & von Hippel, W. (2022). The better to fool you with: Deception and self-deception. *Current opinion in psychology*, 47, 101385.

Grosz, M. P. (2023). The factor structure of Big Five personality trait measures at the between- and within-person levels. *European Journal of Personality. Advance online publication*.

速水敏彦（1976）．質問紙性格検査の再検査効果．教育心理学研究，24, 57-61.

John, O. P. & Robins, R. W. (1993). Determinants of interjudge agreement on personality traits: The Big Five domains, observability, evaluativeness, and the unique perspective of the self. *Journal of Personality*, 61, 521-551.

Jones, E. E., Rhodewalt, F., Berglas, S., & Skelton, J. A. (1981). Effects of strategic self-presentation on subsequent self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 407-421.

Leary, M. R., Allen, A. B., & Terry, M. L. (2011). Managing social images in naturalistic versus laboratory settings: Implications for understanding and studying self-presentation. *European Journal of Social Psychology*, 41, 411-421.

Margolis, S. & Lyubomirsky, S. (2020). Experimental manipulation of extraverted and introverted behavior and its effects on well-being. *Journal of Experimental Psychology: General*, 149, 719-731.

Tice, D. M. (1992). Self-concept change and self-presentation: The looking glass self is also a magnifying glass. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 435-451.

上田皐介・山形伸二（2023）．事前登録研究：自己呈示の内在化に自己呈示は必要か―自己欺瞞による代替説明可能性の検討―．パーソナリティ研究，32，39-41.

Ueda, S., Yamagata, S., & Kiyokawa, S. (2024). High self-deceivers internalize self-presentation of extraversion through biased evaluation of their performance. *Japanese Psychological Research*, 66, 1-13.

Querengässer, J. & Schindler, S. (2014). Sad but true?: How induced emotional states differentially bias self-rated Big Five personality traits. *BMC Psychology*, 2, 14.

von Hippel, W. & Trivers, R. (2011). The evolution and psychology of self-deception. *Behavioral and Brain Sciences*, 34, 1-16.

和田さゆり（1996）．性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成．心理学研究，67，61-67.

Windle, C. (1955). Further studies of test-retest effect on personality questionnaires. *Educational and Psychological Measurement*, 15, 246-253.

Zhang, Y. & Alicke, M. (2021). My true self is better than yours: Comparative bias in true self judgments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 47, 216-231.

受稿日 : 2024 年 2 月 27 日
受理日 : 2024 年 3 月 21 日
発行日 : 2024 年 6 月 30 日

Copyright © 2024 Society for Human Environmental Studies

This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-Non-Commercial-NoDerivatives 4.0 International] license.

https://doi.org/10.4189/shes.22.37